

「旅行に行こう！ ～その2～」

赤松咲

前は街の紹介でしたが今回は私自身が旅を通して感じたことを少し情緒的に述べたいと思います。

場所つまり空間というものには、それ自体の「におい」みたいなものがある。それは「個性」とでも言おうか。その個性と自身との間で感じる差異を違和感とよぶ。私がかつて訪れた場所には必ずとっていいほどにおいがあった。初めての場所に足を踏み入れた瞬間、その場所の「におい」に違和感を感じてしまう。誰でもこのような経験があるのではないだろうか。今回、中国の休日“清明節”（“中国における清明節は祖先の墓を参り、草むしりをして墓を掃除する日であり、「掃墓節」とも呼ばれた。日本におけるお盆に当たる年中行事である。また、春を迎えて郊外を散策する日であり、「踏青節」とも呼ばれた。<http://ja.wikipedia.org/wiki/>参照）を利用して中国湖北省武漢市に行ってきた。汽車にゆられておよそ二十時間。夜11時に太原を出発し次の日の夜8時に目的地についた時は、その嬉しさと疲れが同時にやってきた。汽車から降り、駅の外で友人に迎えられた。武漢市はその経済的重要性から副省級都市に指定されている大都市。駅前にはショッピングモールが立ち並び、ネオンが光り、群衆があり、人々はおしゃれな服に身を包み、クラクションの音が鳴り響く。それはどの都市にもある画一化された景色だった。先ほど述べた都市のにおいというものは、その都市の大小関わらずどこにでもみられるものだ。何故ならばひとつとして同じ都市はなく、各々がそれぞれのにおいを放っているからだ。しかし今回、不思議なことにその「におい」というものが感じられない。こんな都市ははじめてだ。はじめてだからこそワクワクする。はじめてだからこそ少し怖い。これからどんな旅になるだろうか。実際、旅をしてみると武漢市はなんとも面白い。都市全体に流れる長江にそって中心部を抜けると山が見えてくる。木々がつくり出すその澄んだ空気が感じられる。武漢市は近代都市と自然とが融合された街なのだ。この街の空気、肌触り、雰囲気、人々…、それらが私にはとても快適に感じられる。旅をしている最中、なぜ私がこの都市からにおいを感じられなかったの

かが分かった。恐らく、私とこの都市は似ているのだろう。そんな事を密かに感じていた。「似ている」からこそおいが分からなかったのだ。なぜなら自分自身のおいとは分からないものだから。これから更なる新しい地に出会う時、私はどのような種のおいを感じることができるだろうか。好き嫌い、理解できない、優しい、つまらない…、様々なおいがあるだろう。中でも嫌いなおいに出会うこと、つまり強烈な差異を感じとることは重要で面白い事かもしれない。それはかつて知らなかった一面をみることができる最大の機会だからだ。私はその違和感を恐れて排除するのではなく、自身の中に取り込み、そして新たな一面をみていきたい。



武漢市の植物公園にて。中でも武漢大学は桜の名所ですが、今回は残念ながら大雨で散ってしまい、見る事ができませんでした。



武漢市の夜景。橋から見下ろす街の景色は格別。



武漢市の中心部。東京銀座のような町並み。

2015/04/10